

研究開発成果実装支援プログラム（公募型） 実装活動事後評価報告書

平成 26 年 4 月

研究開発成果実装支援プログラム（公募型）

プログラム総括・アドバイザー委員会

実装活動

名称：WEB を活用した園児総合支援システムの実装

期間：平成 22 年 10 月 1 日～平成 25 年 9 月 30 日

実装責任者：筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勅江

1. 総合評価

十分な成果が得られたと評価する。

実装責任者の 12 年間にわたるコホート研究の集大成である、WEB 園児総合支援システムを高く評価する。子ども・保護者・保育専門職が相互に情報交流できるツールを創出したことによって、保育の質向上を目指した実践的な取組みが全国規模で広がりを見せつつある。本システムを導入した保育の現場からは、内容の適切さ、わかりやすさ、システムの柔軟性、安価なコスト等が評価されているほか、とりわけ、子どもの発達に関する気づきを促す効果があるとして、利用価値が高いといった反響が寄せられている。ユーザビリティへの配慮は勿論、保護者と保育専門職の両者が、子どもの成長に関する相対的な評価を視覚情報によって共有できる点が本システムの大きな特徴となっている。保護者にとっては、子どもの成長を相対的に知ることを通して、育児についての安心感が培われる。また、保育専門職にとっては、客観的な評価を拠り所としながら、子どもの成長に即した保育が実践できるようになったことで、仕事に対する自信を醸成することに繋がっている。本システムは保育の現場ですでに重要な役割を担いつつあり、よりよい保育実践の在り方を目指して、新たな支援ループが確立しはじめている。さらに、早期の支援が必要とされる子どもや保護者を対象とした、きめ細やかな観察システムとして活用していくための方法が検討されている。全国夜間保育連盟のバックアップのもと、保育パワーアップ WEB 研究会の活動と連携することによって、本システムは広く認知されつつあるものの、さらに多くのユーザーが獲得できるよう、専門分野の枠を超えた広報活動が求められる。

2. 各項目評価

(ア) 実装支援の目標の達成状況

当初の目標を超えて達成されたと評価する。

科学的根拠に基づく保育実践を提言し、実装活動を通じて WEB 園児総合支援システムを 91 箇所の保育所及び幼稚園に普及させた。本システムは Salesforce.com 社のプラットフォームに設置されており、4 万人を超える園児情報が登録されている。保育専門職は、このシステムを利用することによって、子どもの発達過程を定量的・相対的に把握し、配慮を要する子どもや保護者への支援を早期に開始することが可能となった。障害児共同保育を行っている保育所では子どもの理解のために本システムが利用されており、ユーザーが現場のニーズに合わせてシステムを活用するという動きも見られた。社会実装を見据えて、実装開始当初より保育パワーアップ研究会を組織し、

保育に関する様々な問い合わせや相談にインターネットを通じて対応している点も特筆に値する。よりよい保育の実践に向けて、今後も人材育成や啓発活動を継続的に実施していくことが望まれる。

(イ) 実装支援終了後の実装の継続及び発展の可能性

大いに可能性があると評価する。

WEB 園児総合支援システムは、保育の質を向上させるための実践的なツールとして全国規模で普及する可能性が高い。システムの導入実績はもとより、いくつかの強み—保守費用が安価であること、現場の保育専門職が操作しやすい利便性を兼ね備えていること、全国夜間保育連盟のバックアップがあること等—が、本実装の継続及び発展の可能性を裏付けており、すでに導入を希望する機関からの問い合わせも多数寄せられている。保育の質を向上させるための保育パワーアップ WEB 研修会をはじめとした PR 活動も十分に行われており、今後は、潜在的なユーザーの獲得に向けた取組みについて検討を重ねていくことを期待する。

(ウ) 組織体制は適正であったか

適正であったと評価する。

継続的かつ着実に保育の質を向上させるために、保育所、幼稚園、保護者、全国夜間保育連盟、システム開発業者等、多様なステークホルダーが協働して実装活動を進めた。研究者のみの活動に陥ることなく、多くの保育専門職が参画する組織体制を作り上げたことで、現場のニーズに最も近いシステムを完成させることができた。さらに長期的・持続的な社会実装へと発展させるためには、保育施設の経営者を織り込んだコミュニティづくりを実現させる必要があるだろう。

3. その他特記事項

汎用性の高いツールを用いた合理的アプローチによって、定性的なデータと定量的なデータとが混在する研究領域において、有効利用が期待できるシステムを確立したことは本プロジェクトの大きな成果である。実装活動で得られたデータに基づき発表された論文は国際誌に多く採択されたが、筆頭著者は安梅教授に留まらない。多様な研究者が本プロジェクトに関与したことはあえて述べるまでもないが、筆頭著者の多くが若手研究者であった点は最後に強調しておきたい。このことは、実装責任者が研究指導・人材育成に尽力された証左である。

以上